

# ニーナ Z の完全更新つる下し栽培

## 基本的な仕立て方

### ニーナ Z の特徴

- ・ ほぼ節成りで分枝性が強く、樹勢が衰えないため、摘芯及び更新つる下しに適する
- ・ 果形の安定性が非常に高い
- ・ うどんこ病、褐斑病に非常に強い耐病性である

### 力枝を更新するメリット

- ・ 摘芯によって、つる伸びへ向く力を果実へ向かわせる
- ・ 摘芯することで、力枝の果実肥大が早くなり、引きずらない
- ・ つる下し作業の軽減

### 仕立て方

- ・ 充実した樹を作り、初期に根を深く十分に張らせる  
→ 後半まで樹勢維持に大きく影響  
活着後に灌水量が不足すると上位の側枝、孫枝の発生に影響するので注意
- ・ 下位節の側枝、花は速やかに摘除
- ・ 主枝は 12 節程度の低節位で摘芯する
- ・ 力枝は 5~7 節より 2 本、10~12 節より 2 本にする
- ・ 力枝は下の 2 本を片側に、上の 2 本をもう一方の側へ振り分ける。
- ・ 力枝以外の子枝は 1 節摘芯 ※初期作業の簡素化で力枝以外の子枝は除去しても可
- ・ 力枝を 4~5 節で摘芯（9 月定植では初期は 2~3 節で摘芯）し、次世代枝に切り換える  
※摘芯は小さい芯を摘むように心掛ける
- ・ 左右に振り分けた力枝の摘芯は、間隔を 10 日から 2 週間程度空ける
- ・ 更新した後は、力枝とする次世代枝以外の脇芽は早めに摘除する
- ・ 孫枝→ひ孫枝→玄孫枝→…と更新を繰り返す（栽培終了時で 20 回程度の更新数となる）  
節間の詰まった芯は更新を控え、伸びてきてから摘む
- ・ 節間が詰まらないように、夕方の温度はしっかり確保する
- ・ 夜温を 13~14℃は確保する（孫枝を出す&果実肥大のため）

### 注意点

- ・ 力枝の収穫後、更新後の新枝の収穫までに間が空く  
力枝の摘芯を 10 日から 2 週間程度空けることで、収穫の谷間を少なくする
- ・ 更新型の場合は次の枝をスムーズに出すためにも、着果した果実の肥大を促すためにも、摘芯栽培に準じた温度・灌水・追肥が欠かせない  
夕方から夜にかけての温度を下げすぎない（通常のとる下ろし栽培での管理はしない！）  
灌水を積極的に行う  
夜温設定を通常のとる下し栽培より 1~2℃上げる
- ・ 更新力枝の節数を多くすると、果実が短形となるので注意
- ・ 作業が遅れる場合は、少ない節数でまず摘芯！！
- ・ 葉が大きくなるので、親葉は早めに摘葉する（力枝の節の葉から摘除）

## ※栽培方法の応用

○力枝は 6～8 節より 2 本、10～12 節より 2 本にする

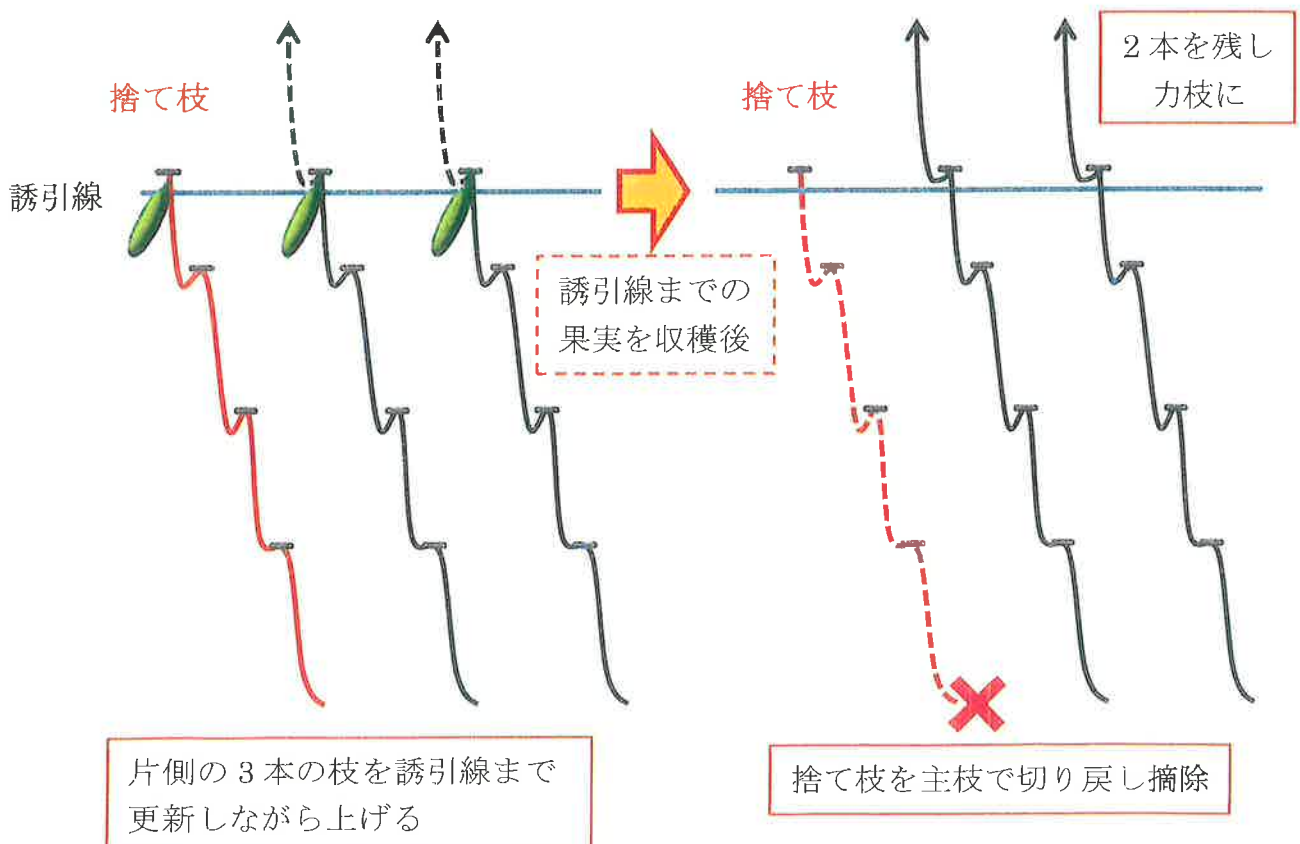
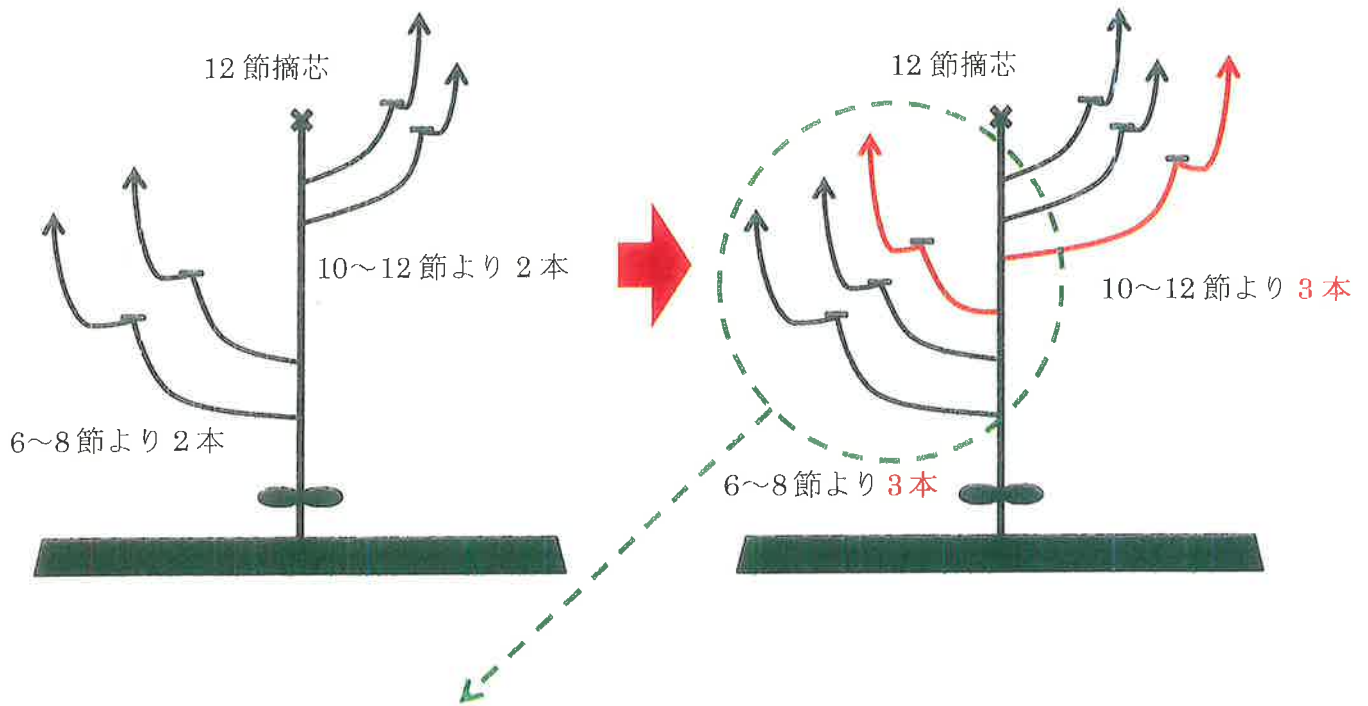
→→① 力枝は 6～8 節より **3 本**、10～12 節より **3 本**にする

それぞれ 1 本ずつを **捨て枝**とし、他の力枝と同様に更新して、上の誘引線まで上げる

**捨て枝**は誘引線までの果実を収穫したら、主枝で切り戻し摘除する

**捨て枝**はクリップの色を変える、印をつける等、摘除する枝を決めておく作業しやすい

※厳寒期は日照量が少ない ⇒ 力枝の本数が多いと実だまりになりやすい

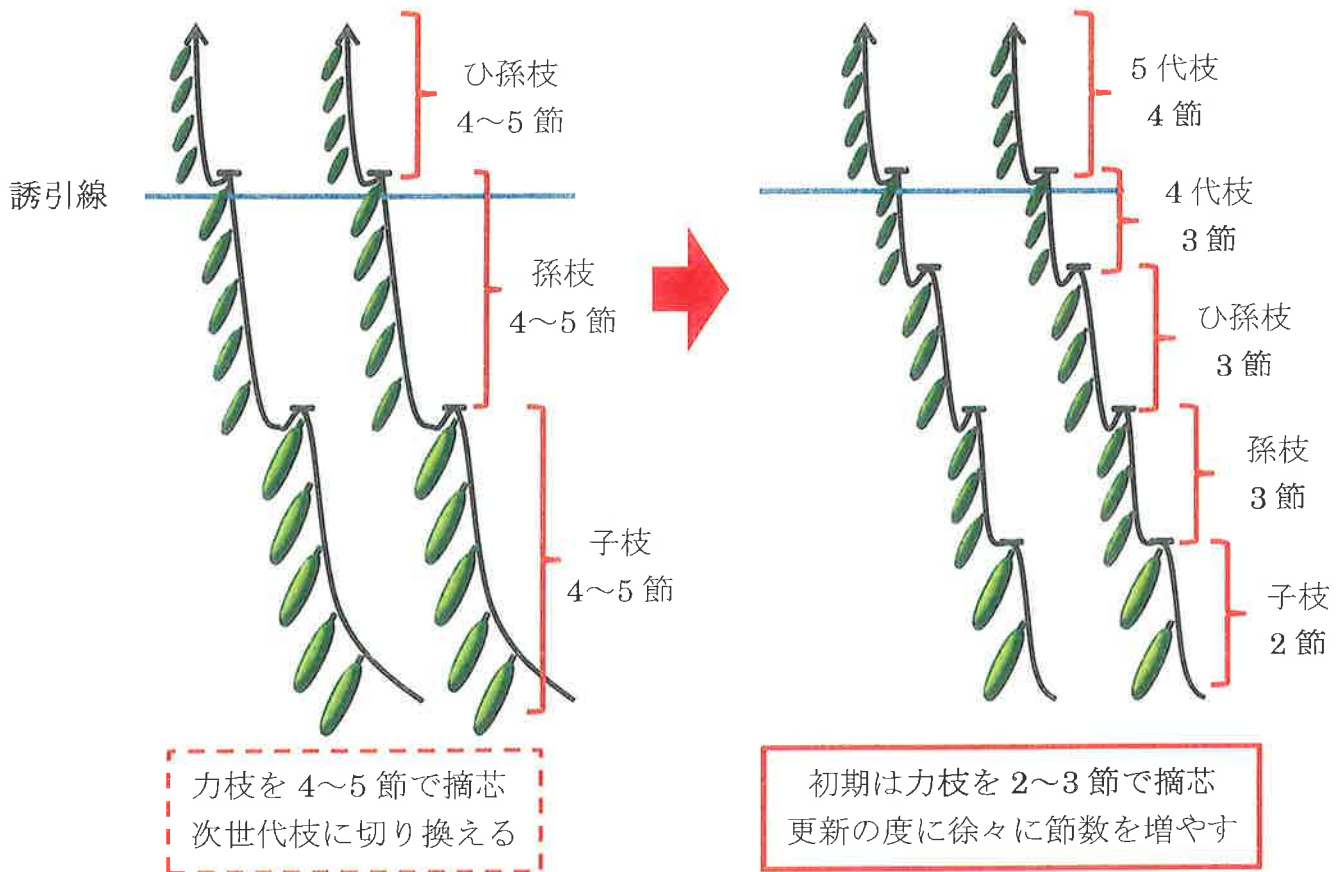


○力枝を 4~5 節で摘芯し、次世代枝に切り換える

→→② 初期は力枝を 2~3 節で摘芯し、更新の度に徐々に節数を増やす

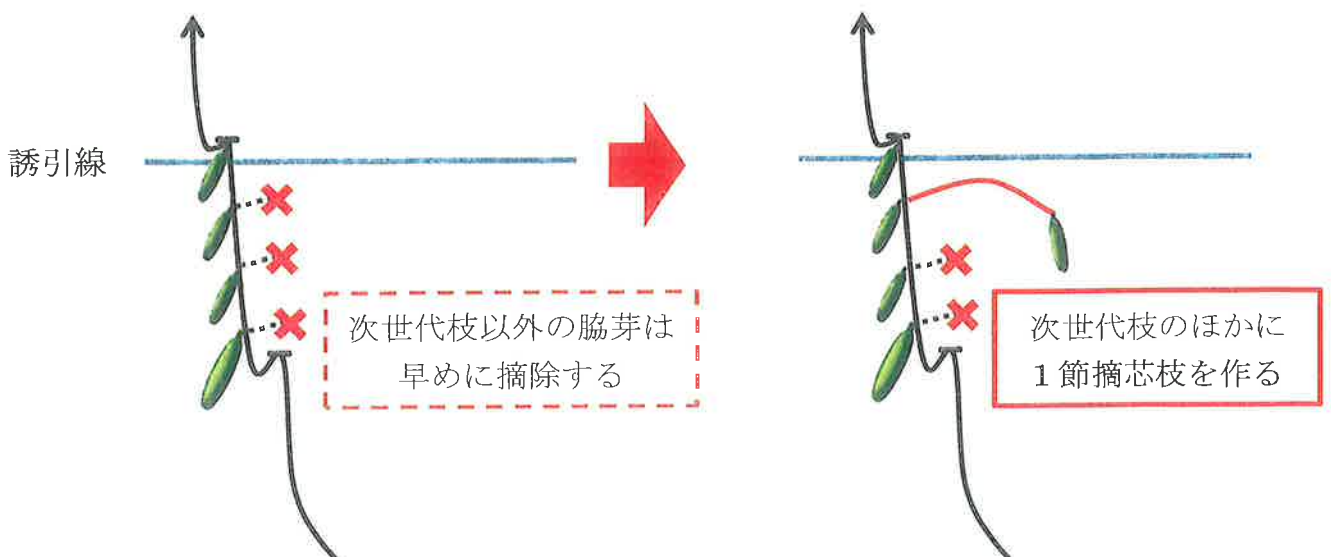
例) 子枝 → 孫枝 → ひ孫枝 → 4代枝 → 5代枝 → 6代枝 → 7代枝 → ...  
2節 3節 3節 3節 4節 5節 5節

節数を少なくすることで果実の肥大を早め、枝の回転を速くする  
実だまりが起きにくいので、結果として収量の安定につながる  
更新するペース・頻度が多くなるため、初期の摘芯回数が増える  
9月定植の場合は特に生育速度が速いので、初期は2~3節での更新が重要となる



○更新した後は、力枝とする次世代枝以外の脇芽は早めに摘除する

→→③ 更新時、次世代枝のほかに 1 節摘芯枝を作る



○更新した後は、力枝とする次世代枝以外の脇芽は早めに摘除する

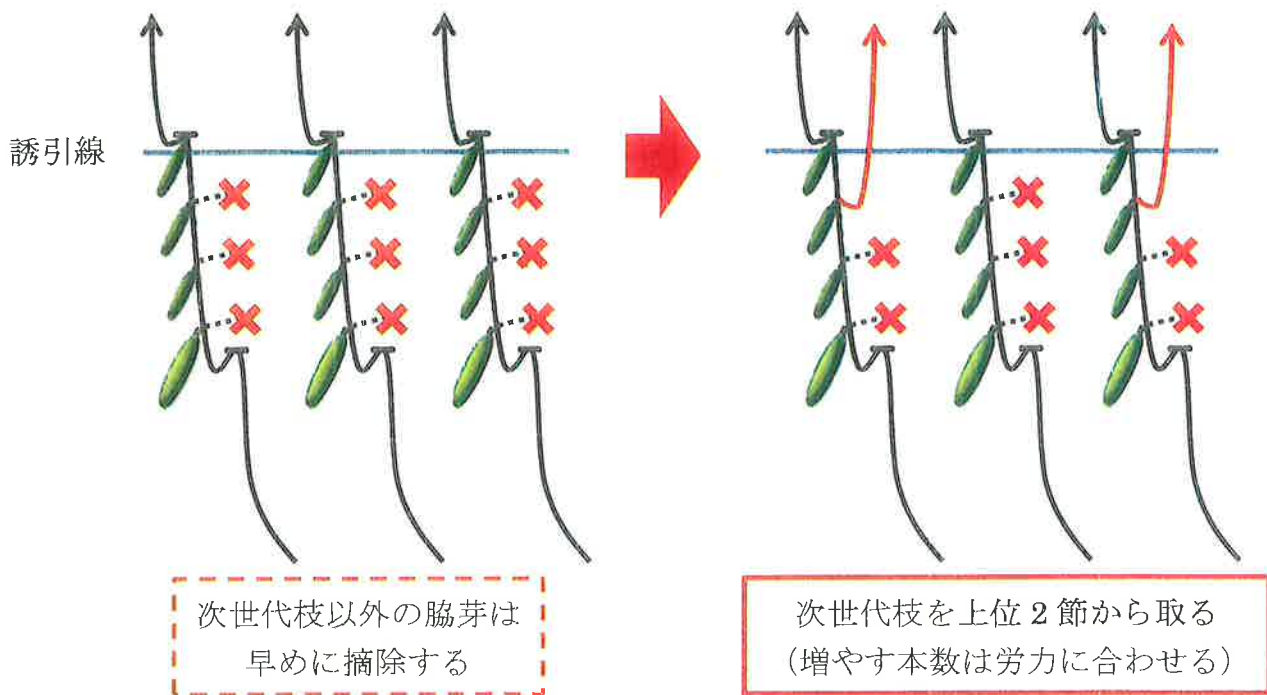
→→④ 2月中旬以降に力枝を増やす

力枝とする枝を上から2節分残す（作業量に応じて株当たりの増やす本数を考える）

※2月以降は日照量が多くなるので、力枝本数が増えても問題ない

例）株当たり6本にする → 力枝2本のうち1本を2節分残す

株当たり5本にする → 力枝4本のうち1本を2節分残す



応用として記載した方法は、より収量を安定させる方法と成り得るものです。

特に、春先に力枝の本数を増やすことは収量を増やすために非常に重要であると考えますので、④については、積極的に採用していただきたいです。

但し、上に挙げた方法はそれぞれ作業量の増加を伴います。各々の労力に応じた方法を検討していただければと思います。